



## ネグロスも私たちが… ネグロスと北海道訪問で感じたこと

廣瀬康代／ひろせ・やすよ  
APLA理事

3年ぶりのネグロスへの旅は、生活クラブスタッフ同窓会ツアーに混ぜてもらい、パラゴンバナナの生産現場に初めて行きました。バナナがたどり着くまでの情報は、今まで文字や写真で見ただけで知っているつもりでしたが、現地の人たちと会ってみると、多くの人の手を介して私たちの口に入っていくのだから、改めて実感しました。

バナナの実ができたタグをつけ、袋を掛け、雑草を取り除き、収穫をして、山道を通り、水洗いしてパッキングされ、船でバコロドからマニラを経て日本へ運ばれます。以前は熟れすぎて食べられないバナナが届きましたが、パラゴンがスーパーで売られているバナナと変わりない大きさと美しさになった裏には、多くの努力と、たくさんの方の廃棄されるバナナがありました。産地の集荷場では、とても急な山道を運んできた籠の中のバナナ(30kg以上)が4分の1しか買収されなかった現場を見ました。遠く日本の消費者に届けるために傷み具合・見た目などの厳し

いルールが決められています。きれいなバナナを食べたい私と、一生懸命育てられたバナナが廃棄される現場。生産者はバナナを出荷すればお金になるのでどんどん出荷する。少しでも多くのお金があれば豊かになっていく実感があるでしょう。一方、豊かになった日本の食、そして消費するだけの私たち都会人はこの事実はどう向き合ったらよいか複雑な思いでした。

2006年12月、北海道の酪農家・三友盛行さんとネグロスの農村地域を一緒にまわり、三友さんが行うマイベース酪農の話を知りました。今年9月、APLAの内ツアーで初めて三友牧場を訪れ、自然と折り合いとつける適正な飼料、経営手法をつくりあげ、風土に生かされた酪農方法を見ました。ネグロスも私たちも、「共鳴して・共感して・共生して」「三友さん、お互いに同じ方向を見据えつつ、それぞれの場所や文化や暮らしを育み、人と人との交わりを通じて、お互いに支えあえる関係になれたらと思います。■

「ポコポコ」は「サンゴ礁の満潮」をイメージしています。潮が満ちていくにつれ、サンゴ礁のあちこちに「ポコ」(水たまり)が現れて、ポコポコ同士がつながり始め、いつの間にか一面海になるというイメージです。アジアの各地域で「ポコ」が生まれ、気がつけばつながっているような活動をしていきたいという思いがこめられています。

### CONTENTS ■ HALINA 06 2009.11.01

02	Relay Essay ポコポコ⑥	ネグロスも私たちが…—ネグロスと北海道訪問で感じたこと	◎廣瀬康代
03	【特集】水はみんなのもの	「水はわたしたちのものだ」—世界で広がる「水」を取り戻す運動◎山本奈美 小規模な水道システムの充実を図る◎オウカ・イクゼンハ 荒川を歩く—荒川と私たち◎長倉徳生	
08	Topics	「北海道の酪農現場を訪問する旅」報告—「マイベース酪農」の現場を見て◎野川未央 東ティモールの住民投票から10年—国造りの歩みを振り返って◎松野明久	
10	堀田正彦のアジア食い倒れ⑥	お粥の話◎堀田正彦	
10	むらさきを歩く⑥	ここでは60代は若者なんです◎大野和興	
11	あっちこち雑学手帖⑥	最強+最強=?◎松田麻衣子	
11	じゃらん・じゃらんアジア⑥	ヤシとともに◎村井吉敬	
12	撮っておきアジア⑥	インドネシア、バブア州◎豊島洋	
13	APLA生活⑥	エコシュリンプ—エコがついているエビだから!◎光富佳子	
14	Voice from APLA partners	【北部ルソンより】BMWのプラント設置が完了しました。 【インドネシアより】エコシュリンプ加工工場・ATINA社でせっけん製造を開始しました。	
15	事務局便り		

### 表紙のことば

昨年春、石垣島に嫁いだ高校時代からの友人を訪ねたとき、『ハリーナ』の表紙をアジアの織物で飾るため八重山ミンサー織を調べたいと申し出た。ミンサー織の特徴でもある五つと四つの柄柄は「いつの世までも未永く…」を意味し、かつて、結婚の際に男性からの愛を受け入れる証として女性が帯を織ってプレゼントしたという。表紙のミンサー織はその友人が貸してくれた。東京や海外で育った彼女が石垣島へ嫁ぐことを決めたのは、大好きな彼がいるにせよ、一大決心だったのではないと思う。いつも案外淡々としていて、石垣で会ったときも新しい生活を楽しんでいるようだったが、慣れないこともあるだろう。ミンサー織のエピソードを聞いたときに、彼女の結婚と織物が私の中で自然と重なった。この夏には赤ちゃんが誕生した。ミンサー織を目にするたびに、石垣で生活を築いていく彼女のことを、これからも思い出すのだろう。(吉澤真満子)

## 「水はわたしたちのものだ」 —世界で広がる「水」を取り戻す運動

山本奈美／やまもと・なみ  
TNI/CEO Water Justice project 元スタッフ

「水は売り物でない」を合い言葉に、「水」の運営を人びとの手に取り戻す運動が、世界で大きなうねりを起こしている。公営水道

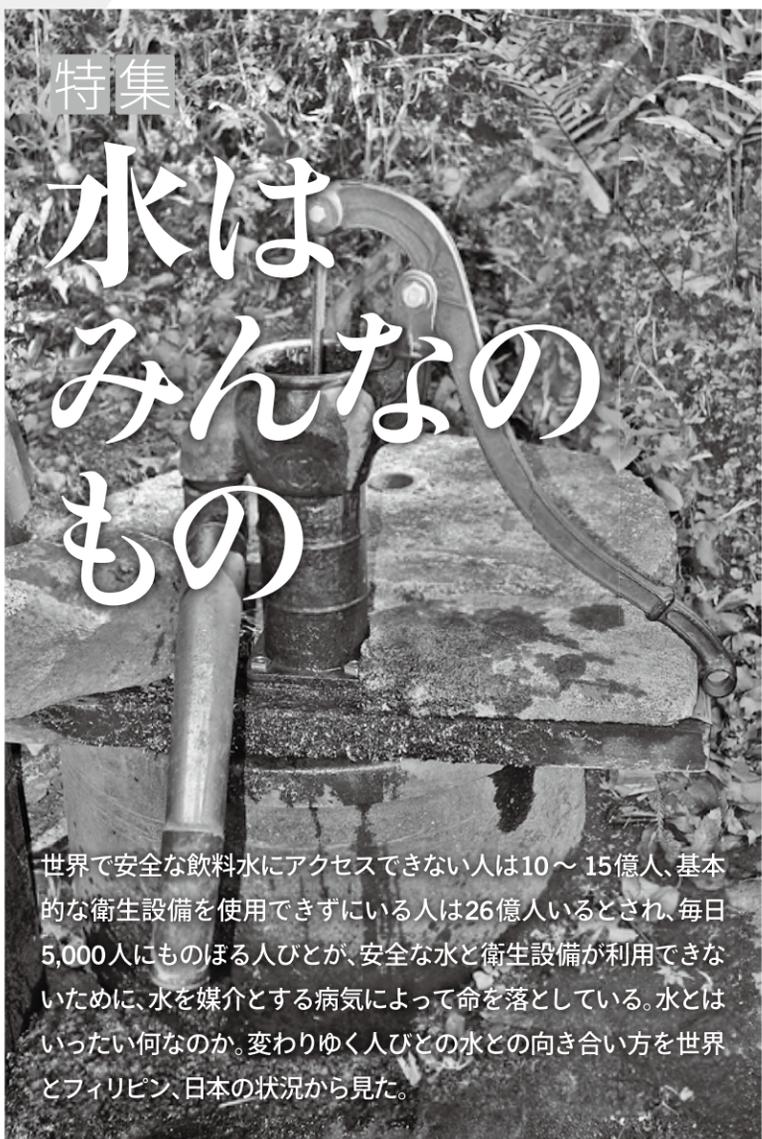
事業体の代わりにグローバル水企業が参入したが、状況が一向に改善されなかったことが大きな要因だ。水供給をビジネスとして展開

するグローバル水企業が行ったのは、利潤追求を前に雇用や投資を大幅に削ることであった。その結果、サービスが低下した上に、水道料金の急激な値上げが行われた。いのちの源である「水」の運営が市場原理にゆだねられ、利益を生み出す商品として扱われた結果、貧富の差が拡大し、特に貧しい人びとの生活を圧迫している。各地

域で拡大していった水の商品化に反対する人びとの声は国境を越えてつながりはじめ、「ウォーター・ジャスティス・ムーブメント」(公正な水を求める運動)としてグローバルに展開されるようになった。そして今や、国際開発援助機関が途上国を中心に積極的に進めてきた、水の私営化という潮流を大きく変えようとしているのだ。

### 水を取り戻した ボリビア・コチャバンバの事例

「人びとが水を取り戻した」画期的な事例として、ボリビアのコチャバンバの経験を紹介したい。ボリビア第二位の都市の水道が多国籍企業であるアグアス・デル・トゥナリ社(米国の多国籍企業ベクターの子会社)に売却された結果、水道料金は高騰し世帯収入の20〜30%も占めるようになった。水代を捻出するために、貧しい家庭では教育費や医療費を削り、老人は路上で廃品集めに出ることを強いられた。それでも払えなくて水を止められた人びとは雨水を集めることすら禁じられ、「雨水さえ民間企業の所有物か」と題して報道されたこともある。コチャバンバに起



# 特集 水はみんなのもの

世界で安全な飲料水にアクセスできない人は10〜15億人、基本的な衛生設備を使用できずにいる人は26億人いるとされ、毎日5,000人にもものぼる人びとが、安全な水と衛生設備が利用できないために、水を媒介とする病気によって命を落としている。水とはいったい何なのか。変わりゆく人びとの水との向き合い方を世界とフィリピン、日本の状況から見た。

こつたことは、貧しい人びとが求める尊厳のある生活に対して、水をビジネスとする企業がいかに無

関心であるかを浮き彫りにした。この現状に、街に出て抗議行動をする人びとの勢いは増し、軍隊による弾圧にも屈せず



コチャバンバ水紛争(2000年)。(写真提供:パブリック・シティズン(Public Citizen))

続けられた人びとの抗議行動は、とうとう多国籍企業を追い出した。

### 世界に広がった 私営化の撤回運動

コチャバンバに続いて、世界各地の人びとが「水は商品でない」「水はいのち」というスローガンのもと行動を続けた結果、グローバル水企業を追い出し、水の私営化を撤回させるという運動が世界各地で広がり、さらなる盛り上がりを見せている。高まる人びとの声を受けて、「水へのアクセス」を人権として国家に保障させる内容の憲法や条例に修正や追加が加えられた国が続出

しているのだ。ウルグアイでは2004年10月に行われた住民投票の結果、憲法で「水へのアクセスは人権」を

明記し、国による水道事業の私営化を禁じることを住民たちの選択で実現した。この画期的な経緯は世界各地の運動を鼓舞させた。エクアドルやボリビアでも「水へのアクセスは人権」と憲法に記載

させる運動が繰り返されている。アジアでも、2008年11月に南アジア8ヶ国(インド、アフガニスタン、バングラデシュ、ブータン、モルジブ、ネパール、パキスタン、スリランカ)で水と衛生へのアクセスが基本的人権であるとの共同声明が発表されるに至った。

水の商品化反対を合い言葉にグローバル規模に広がった「ウォーター・ジャスティス・ムーブメント」は、水問題を扱う国際舞台においてもその存在感を増している。



メキシコ水フォーラム(2006年)での抗議デモ「全ての人びとに水の権利を」。

る。グローバル水企業の影響を受け、水の私営化を推進してきた世界水フォーラム(3年ごとに開催では、市民のオルタナティブフォーラム)が並行して開催され、世界各地の経験をお互いに学び合い議論し合う場がもたれてきた。

### 「民主的な水の運営」への挑戦

「もうスローガンではない。住民参加による真にパブリックな(公の)水道事業の運営が可能であることを示す時だ」とアルゼンチ

ンの活動家による言葉が示すように、公正な水を求める運動は新たな局面を迎えている。「すべての人びとに水を」を現実のものにするために不可欠な、より民主的で

参加型という原則の下の効率的な水供給の確立へ向けての挑戦が始まっているのだ。地域独自のオルタナティブを築くプロセスは言葉で言うほど簡単ではない。試行錯誤の取り組みが各地で展開されている。

ブエノスアイレスでは、再公営化した企業の経営・運営を労働者たちが担い、その方針決定は市民

や消費者団体の参加のもと行われている。その結果、経営は透明で

民主的になり、企業の運営は受益者の利益確保を中心に据えて展開されるようになった。タミールナドゥ(インド)の取り組みも非常に興味深い。世界銀行の助言によって私営化が進められようとしたが、TWAAD水道公社の労働者、技術者、弁護士、貧しい地域の住民たちが共同でワークショップを開催し、参加型活動を通して明らかにした住民のニーズに対応する形で水供給が行われ、貧しい地域にも安全な水が確保されるようになった。

った。

民主的で参加型の水の運営方法の実現は大きな挑戦である、しかし、貧富の差なく人びとが安全な水を享受できるシステムの実現に向けて、より確実で着実な方法であることは、これら事例によって明らかである。人びとの模索は始まったばかりだ。

安価で安全な水が蛇口から供給される日本の水道事業は、世界から一定の評価を受けているが、実は「私営化」の問題は対岸の火事ではなく、少しずつであるが進行している。世界に豊富に存在する

## 小規模な水道システムの 充実を図る

オウカ・イゲゼンハ / Auke Idchanga

AID財団(オルタナティブで土地に根ざした開発をめざす財団)

「小規模な水道システムの充実を図る」とは、フィリピンのNGOであるAID財団のビジョンである。水利用における適正技術の開発や導入を行っている。中心的な活動は水圧式自動揚水器具の技術導入で、水力を利用するため外か

らのエネルギーを必要とせず、汚染もなく高台へと水を上げることができる。今この技術はフィリピンをはじめ各国へと急速に広がっている。AID財団は1990年に元砂糖労働者組合の運動家たちによ

### 自動揚水器具の効果

水圧自動揚水器具は、高台に位置する地域に設置されている。水を汲みに行くために、100mの高さを毎日1〜2km歩かなくてはな

私営化の問題点を如実に表す事例からだけでなく、私営化に対抗するオルタナティブとしての「民主的な水の運営」を築くプロセスから、私たち日本の住民も学ぶ必要があるだろう。■

#### 【参考資料】

『世界の(水道)私営化の実態―新たな公共水道をめざして』(作品社2007年4月刊)  
『コーポレート・ヨーロッパ・オブザ・トリー!』トランスナショナル研究所編、佐久間智子訳  
『どうなっているの?』日本と世界の水事情―グローバル化のシナジー×水×市民・NGO(アットワークス2007年12月刊)  
神田浩史・佐久間智子・松平尚也・山本奈美編  
『ウォーター・ビジネス―世界の水源、水道民営化・水処理技術・ボトルウォーターをめぐる壮絶なる戦い』(作品社2008年12月刊)  
モード・パロウ著、佐久間智子訳

らないことを想像してみてください! 20ℓのバケツを持って歩くのは、最初はなんともかたくなっても登るにつれて計り知れない重さになる。特に雨季には道がとてつもなく滑りやすい。時には貯水がほとんどなくなってしまうこともある。こうした地域では下痢や皮膚病が蔓延している。飲み水も洗濯用の水も限られ、子どもはお風呂に入れないまま学校へ行く。しかし、自動揚水器具設置後は変化が表れた。水源から高台まで24時間水が流れる

## 荒川を歩く— 荒川と私たち

長倉徳生 / ながくら・のりお  
カメラマン

東京都北西部で暮らす私の身近な川といえば荒川があります。全長173km、長野、山梨、埼玉の県境にある甲武信ヶ岳を源流に東京湾に注ぎます。清らかな流れは、舟下りで名高い景勝地、長瀬をすぎればらくすと平野部に入ったあたりから変わりをはじめます。人が多く暮らす都市部を流れる支流の水が加わるたびに、水が悪くなっていくようです。さらに流れを下ると秋ヶ瀬取水堰があります。ここで取られた水は東京都民の飲み水にもなっています。大雨のあと、この取水地付近へ行ってみると、大量のペットボトルと発砲スチロールが一線に並んでいました。ここまで水位が上がった印です。ペット

ボトルの中には、海外から輸入されたミネラルウォーターのもあるのでしょうか。私は、ここからの水を飲んでいますが。

荒川沿いを歩くと色々な風景を目にします。河川敷を利用した平らなゴルフ場、川まで十数mの釣り堀、自動車教習場、お墓などなど。都市の「合理性」ゆえなのでしょうが、首をかしげてしまいます。

地質学者に聞いた話ですが、長い時間をかけて岩石のミネラルが水に溶けだし川に流れ、植物、動物の体内で大切な役割をはたしたあと、また川に戻り、海に帰っていくそうです。そして再び地核の変動で陸地に現れるという循環をしているということです。何と壮大な水と川のドラマでしょう。

そんなドラマを持つ水と川を、都市生活の「合理性」が、本来の目的とは違ふかたちで使い尽くしている、そんな風景が荒川河川敷を歩いて見えてきました。風景はそこで暮らす人間を変えるといいます。私たち都市生活者はどう変わってきたのでしょうか。《写真撮影：2005年～2006年》



**ペットボトルのゴミ**  
川の水位が下がったあと、流されてきたペットボトルなどのゴミが残される。(埼玉県志木市)



**マンションと墓**  
堤防の幅を広げたためお寺は堤防上に移動し墓は堤防の間に残された。(埼玉県川口市)



**岩淵水門と釣り人**  
河口から22キロ地点にある旧岩淵水門(1924年完成)ここから先は洪水を防ぐために掘られた幅500mの人工の河川となる。(東京都北区)



**教習所の車**  
河川敷内のある自動車教習所。このあたりでは河川敷が数百mに及ぶ。(埼玉県川口市)



**高速の橋**  
荒川をまたぐ首都高速道路。開通によって東北自動車道からスムーズに都心に入れるようになった。(東京都北区)



**秋ヶ瀬取水堰**  
ここで取水された水は朝霞浄水場に送られ、品川区、千代田区、中央区など都心の上水として供給されている。(埼玉県志木市)



自動揚水器設置前の水汲み。

### フィリピンから世界へ

AID財団では、この

ようになるのだ。AID財団では、貯水やパイプ、自動揚水器、配水管、貯水池を合わせて設置している。自動揚水器は燃料や電気を必要とせず水圧で機能するので、水の流れはゆっくりでも継続的だ。高台の上には、1日平均で1万ℓ、最大50家族の水200ℓ分を確保できる。20ℓから200ℓは大きな違いだ。子どもが健康になる、家の近くで洗濯ができる、家畜の水や野菜栽培にも使える、また養豚や養殖もできるなど多くの改善が起きた。現在までに設置した100以上の地域で、このような

変化が見られる。

### 技術が地域に根付くために

AID財団は単に技術導入だけではない。技術は技術で、水供給の継続性は保障できない。地域開発担当者がおり、プロジェクトを進めていくに当たり社会的側面も考慮する。会議設定、水利協会の設置、役員の選出、方針の策定、水利区間の設置、地元技術者の選出、建設時の働き手を集め、植林活動(将来の水資源確保のため)なども行う。各家庭には揚水器設置のために月々40円の負担金を出してもらっただけだ。

自動揚水器の建設や設置の際には、2〜3人の地元の技術者が関わる。AID財団が地域を離れたときに、揚水器の利用方法や維持、修理などができるようになるためだ。修理に必要なのは唯一ドアの蝶番であり、これがこの揚水器をシンプルかつユニークにしている。

無名だがとてつもない揚水器の開発に継続的に取り組んでいる。歴史を見ると、産業の発展時期と共に技術は間違った時代を過ごし、モーターやポンプは燃料や電気を使用して稼動するものとなった。しかし、燃料高騰や環境への配慮から、自動揚水器への注目が集まっている。事実、AID財団では、アフガニスタン北部にも自動揚水器を3台設置し、3人のアフガニスタンの技術者がフィリピンにある技術センターで学んだ。彼らは国へ戻り揚水器の設置に励んでいる。同じような状況がカンボジア、ネパール、コロンビア、マ

ダガスカルにも起きている。世界中には数百数千ヶ所とこの技術を待つ高地の住人たちがいる。様々な種類の揚水器の開発とリニューアル、社会的側面も考慮した準備、地元技術者の育成など、この総合的なAID財団の取り組みは、国内、国際的にも高く評価されている。アシュデン賞やエネルギーグロブ賞も授与された。これらに表彰されたことは、この自動揚水器の信用性を高め、技術をよりレベルアップすることにつながる。そして何より高台に住む最貧困地域の人びとを助けることができるのである。■



自動揚水器は、不思議な機械!

## 「マイペース酪農」の現場を見て

野川未央／のがわ・みお  
APLA事務局

APLAは、9月4日～6日の日程で、北海道の酪農現場を訪問する旅を企画し、会員・関係者含め15人以上の方に参加いただいた。

### 「マイペース酪農」とは？

「マイペース酪農」とは、国の農政（「ユアペース」ではなく、「適地・適作・適量」を基本として、その土地の資源を循環させた酪農方法のことだ。メンバーの三友さん、森高さん（中標津町）、石澤さん（厚岸町）の牧場を見学させていただき、中心的な存在である三友さんの牧場では、マイペース酪農の月1度の定期交流会にも参加させてもらった。まずは、約55haの広さがあるという三友牧場の草地を見学させてもらう。「見渡すかぎり…」とはこのことだ。三友さんによれば、1haあたりに牛1頭というのが大原則にもかかわらず、慣行では0.5haに1頭が普通だという。わたしたちにとってはピンとこない広さ、それを察してか「6畳1

間に毎日2人で暮らせて言われるのと同じだよ」と説明してくださった。

しかも、最近では、フリーストールと呼ばれる大規模酪農法が流行しているという。これでは「6畳1間に2人」どころではない。このように牛舎から死ぬまで（乳牛としての役目を果たして屠場に送られるまで）出ることができない牛たちを見る機会もあった。また、大規模酪農の牧場では、フィリピンや中国から人材を「研修生」と称して呼び入れ、実際には安い労働力として実態を目的にしたりした。農場の入り口には小さなプレハブ小屋があり、研修生はそこで暮らしているのだという。効率を第一に大量生産へと突き進む酪農が、牛にもヒトにも環境にも負担をかけていることは、明らかな事実として存在している。

### 交流の場があるとういこと

マイペース酪農に話を戻したい。土曜日の午後に開かれた今回の交流会に

は、約60人が集まった。女性、子ども連れの若い夫婦、新規就農者などが多いのも印象的だった。メンバーの方々がそれぞれ持ち寄ってくれた昼ごはんを囲みながら、1人ずつの自己紹介と近況報告。参加者全員が話をする、これがマイペース交流会がはじまってから17年間、ずっと変わらないやり方だ

という。そして、このことが会の風通しをよくし、それぞれの参加者の学び・向上につながっている。お互いの話を聞きあい、それぞれの「マイペース酪農」を確かめあい、またそれぞれの現場へ戻っていく。共感しあえる仲間への存在は何ものにも代えがたい。ネグロスの女性たちも定期的な交流の場をもちたいといっていたことを思い出した。

それから、マイペース酪農の皆さんから頂いた非常に興味深く、そして励まされるようなデータ（巻）を紹介したい。粗収入だけを見ると規模が小さく、生産が劣るようになると考えられがちなマイペース酪農だが、所得額も所得率も慣行酪農の人たちの平均を上回っていることが明らかになっているのだ。

### 新しいつながり

資源を循環させ、持続可能な形での酪農を営み、豊かな暮らしを送り、そ

## 東ティモールの住民投票から10年 国造りの歩みを振り返って

松野明久／まつの・あきひさ  
大阪大学大学院 国際公共政策研究科 教授

今でも、1999年8月30日、独立かインドネシアへの帰属かを決める住民投票の日の朝を迎えたときの「今日、歴史がつくられる」という張りつめた感覚を思い出す。当時首都デイルの投票所を管理する国連の選挙管理官を務めていた私は、ひと月半に及んだ投票準備の激務に加え、吹き荒れた暴力による緊張で、疲労もピークに達していた。

そしてそのとき、歴史は確かにつくられた。40数万人の一票一票によって。それまで独立運動の先頭に立ってきた指導者の一票も、17才になったばかりの若者の一票も、文字を読めない山村の老人の一票も、それが一票であるということにおいては平等だった。人びとは等しく一票を投じることで歴史に参加した。私はその一票一票を数えながら（開票スタッフだったので）そのことを実感した。



ある町での住民投票10周年記念イベント「木登り競争」。上に賞品がぶらさげられてあり、早い者勝ちで到達してゲットする。

### 選挙から10年たった今…

あれから10年。何が一番今の私にとって気がかりかという点、その原理的平等という感覚の喪失であるように思う。独立後の東ティモールの政治は明らかに「人治」に向かっており、法律や規則ではなく、地位を得た者、権力をもった者の言うことが「規範」になっている。いわゆるエリートの誕生だ。それが汚職を生む背景にある。一方で、間違った上司をさすこと、ましてや異議を唱えることははばかれる。それは政府だけではなくNGOなどでも慣習になりつつある。これはかなり由々しき事態だと言わなければならぬ。

それでは、人びとの暮らしはよくなったのかと聞かれると答えは難しい。

10年前と比べて物価は相当高くなった。国連暫定行政下での異常なインフレに加え、米ドルを通貨としたことで高価格が定着した。公務員の月給は100米ドルから300米ドルぐらいたが、首都に暮らして電気代、燃料代、水代、携帯電話代、交通費、食費などを払えばいくらか残らないだろう。

### 独立後のフレタリン時代

フレタリン時代（2002～2007年）、経済発展のための政策はほとんどなかった。天然ガス開発から得られる税収は基金に積み立てられ、投資に回らなかった。それを「手堅い」経営感覚と言えはそうなのかも知れない。一方で、工業、農業、観光などいづれの分野でも開発は進まず、海外からの投資も少なく、経済的停滞と失業の蔓延が若者から希望を奪うような状態になっていた。それが2006年の危機を激しいものにしたといえる。

2006年の危機では、軍隊内部の差別問題から首都全域を覆う「エスニック」対立（東部人・西部人に発展し、放火・略奪が横行し、避難民は15万人にも達した。それまで平和構築のモデルとされていた東ティモールの社会がいかに脆弱で、その安定がいかに表面的であったかを浮き彫りにした。治安機

【表】マイペース酪農と大規模酪農の所得比較

	マイペース型酪農を長年にわたり営農してきた9戸の実績平均	別海農業協同組合の平均
粗収入	2,671万円	4,595万円
所得	1,101万円	907万円
所得率	41%	19.7%
草地当たりの所得 (所得万円/草地ha)	20万円	11.3万円

(08年4月作成)

うした仲間たちが集まって元気な地域をつくっていく。それを実践している

方々と直接お会いし、本当に皆さんハツラツとされていると感じた。毎日寝てから起きるまで、365日休みなしで働くということは生半可なことではなく、自然や動物が相手となれば楽しいことばかりではないと思う。しかし、まさにアジアの仲間と一緒にめざしている地域内循環、地域自立をすでに体現している方々とのつながりを創れたことは、APLAにとって次につながる大きな出会いだと感じている。

（注）フリーストール・コンクリートの舎内で牛が動き回れるよう放し飼いにし、中に設置されている個別の休息場所を自由に横臥休息させる方法。

※「マイペース酪農」に関しては「ハリナヴォール1/10」の巻に詳しく掲載。

三友牧場「チーズ工房」<http://miono-cheese.com/> チーズの購入もできます。

構（軍・警察の規律がほとんど簡単に崩壊し、危機がオーストラリア軍等の投入によって收拾されたことは、まだまだ国として独り立ちできないことを意味していた。

### 闘いは続く、東ティモールの国づく

その後、2007年の大統領選・議会選を経てシャナナ政権が誕生し、政治は安定へと向かった。シャナナ政権は天然ガス収入の基金を大胆に使い、高齢者支援金、母子家庭奨学金といった社会福祉策、高等教育無償化、米の大量輸入等を行ない、さらに大規模なインフラ開発計画を立てている。フレタリン時代に比べ積極的な政策だと思いが、経済発展の方向性そのものがあり議論されずに進められていることに不安を抱くのは私だけだろうか。農業発展の基盤作り、製造業の育成、観光産業の振興などビジョンが示されていない。

東ティモールの人たちの忍耐力は24年に及ぶ闘争で証明済みのものだが、平和で公正な、繁栄する国を作るといふ夢を実現するためにはさらなる闘いの継続が必要だと思ふ。「[A Lura Continua]（闘いは続く）というスローガンの通りに。」

（注）フレタリン・東ティモール独立革命戦線。東ティモールの左翼政党。独立以来2007年まで政権与党だったが現在は野党。

03

# あっちこっち 雑学手帖 06

松田麻衣子 / まつだ・まいこ  
APLA事務局



イラスト：上原祥子

フィリピンには競合する2大ファーストフード店がある。ひとつがマクドナルドで、もうひとつがジョリビー(Jollibee)。ジョリビーのメインはハンバーガーやフライドチキンだが、フィリピン人の食生活や舌に合わせたメニューも展開し、フィリピンにおいては世界を席巻するマクドナルドを唯一業界2番手に押し留めた。郷に入っては郷に従えとマクドナルドも手を打っているようだが、スパゲッティだってあるよと聞くと、フィリピンマックの苦戦のほどが窺い知れるような気がする。

## 最強+最強!!?

クフィッシュやナマズの炭焼きなどシンブルかつローカルな食材ばかりだが、問題はそこではない。真っ赤な看板には、どう見てもマクドナルドとジョリビーのキャラクター、ドナルドとジョリビーが仲良く「おいしいよー」なんて笑っていて、どこかでよく見たような黄色の大きなMで『McJollibee』とあるのだ。

2007年、マクドナルドはセブに本拠地を置くハンバーガーショップ『マックジョイ&デバイス』を相手取り、商標権をめぐって訴訟を起こしている。同じファーストフード店であること、マクドナルドの『Mc』とマックジョイの『Mac』の類似性が認められマクドナルドが勝訴したが、マクドリビーはその比ではないにもかかわらず、単純に他人のふんどしで相撲を取っているとも見えず、むしろその店名と看板がどんな得をマクドリビーにもたらしたのか聞いてみたいなんて思うのは、後ろめたさなど欠片もなさそうな店員さんの明るさや街の風景の中で違和感が全くないことがそう思わせるのだろうか。変な話だが、あちこちで似たようなファーストフード店が勃興するフィリピンにあってマクドリビーのような存在はどこか心安らぐものだとも思うのである。

01

# 堀田正彦の アジア食い倒れ 06

堀田正彦 / ほった・まさひこ  
㈱オルター・トレード・ジャパン代表取締役



イラスト：保光美由紀

## お粥の話

異文化と接する中で起こるカルチャーショックでもっとも顕著なものが、「ものを食べられなくなる」という症状である。単純に「匂い」に耐えられない、「味」の違いに吐き気を感じる、「食材」に恐れをなしてしまふとかで、急に食べ物が喉を通らなくなる。私自身心底からの「雑食性」で、これまでどんな国に行っても、何を出されても全く平気である。

が日本の無臭の肉とは違い、まさに「野生の豚」の匂いがする。豚肉は沖繩の食文化の真髄である。この状態が二日ほど続き、空腹に耐えながら何か食べられるものを探している時に出会ったのが「フーチパージュシー」だった。これは「ヨモギ入りのお粥」である。ソバ屋のメニューの中で、この不思議な言葉が目にとまったのだ。やさしいお粥だった。ヨモギの苦み、とろける米粒とさっぱりした塩味が、身体にすーっと染み込んだのである。美味かった。そしてこの粥を腹一杯食べた後は、どんな沖繩料理でもおいしく食べられるようになったのである。

考えてみると、この沖繩訪問が私の初めての異文化体験で、それ以来私が食べられないものはなくなりました。

インドネシアで、ヤシ油の揚げ物や甘い味付けに食傷した時には「ブル・アヤム」を食べることにしている。「鶏粥」である。基本は鶏肉のダシ汁で米を煮込んだ粥で、その上に、ピーナッツや蒸し鳥や青菜やネギを散らばめて食べる。東南アジアのどの国にも、その国のお粥が存在する。まずはお粥を食べてその国の文化を身体で味わってみてはどうだろうか？

04

# じゃらん じゃらん アジア 06

村井吉敬 / むらい・よしのり  
早稲田大学教授、APLA共同代表

## ヤシとココナツ

柳田國男が伊良湖岬で流れついた椰子の実を見なければヤシの知識はもう少し広いものになっていたかもしれない。柳田からその話を聞いた島崎藤村が「椰子の実」の詩をつくったため、ヤシは異郷の南の島々に馳せる思いにつながり、私たちのヤシのイメージとして固定した。柳田を怨むわけでも、島崎の美しい詩歌にけちをつけたいわけでもない。多くの南のクニの人びとにとって、ヤシは多彩であり、ココヤシはロマンであるより暮らしそのものだ。



サゴヤシ、パプア・マンブラモ川流域。

白い果肉は燻し乾燥させアブラにする。白い果肉をそのまま食べてもよい。南の人の台所の揚げ油はココヤシのアブラである。揚げ油として使われてきた。若いココヤシの実の中の水(汁)は飲料になる。花序のつけねの部分に傷をつけて、そこからしみ出る樹液を煮詰めれば砂糖になる。樹液をしばらく放置するとヤケ酒でなくヤシ酒だ。

ヤシ科の植物には230属、約3500種もあるといわれる。私たちに最も馴染みが薄いヤシはサゴヤシではないだろうか。東インドネシア、とくにパプアやマルクで、私はこのヤシに出会った。たいへんなヤシである。主食になる澱粉を幹から取り出せるのである。幹を削り、斬り

うな道具でおが屑のように幹を掻き砕く。それを水に混ぜ袋の中でしじこと漉す。漉し出した濃い澱粉を含む水を葛湯のようにして、スープをかけて食べる。パプアではこれをパベタという。噛み出のない主食だが、やみつきになる。辛く、時には酸味の魚出汁スープとともにこれを食べることもたまたまない。家庭の主食だからレストランではあまり食べられない。もつとおもしろいヤシはピンロウ(檳榔)である。その実ピンロウ(檳榔、betel nut)をキンマという蔓植物の葉ないし房、そして石灰と噛み合わせる口が真っ赤になり気分が何ともハイになる。飲み込んではいけない。ほとんど麻薬のようだ。この話をもっと書きたいが紙数が尽きたのでオシマイです。

02

# むらを歩く ⑥

大野和興 / おおの・かずお  
農業ジャーナリスト、本誌編集長

## 117歳は60代は若者なんです



年をとり、放置した畑にススキがゆれている。(埼玉県秩父市大滝で)

カンボジアでNGOスタッフとして村づくりに活動しているサム・ネアリーさん(国際協力NGOである日本国際ボランティアセンター(JVC)のカンボジア現地スタッフ)を埼玉県秩父市の山の集落に案内した。ブノンペン市の農業部門で働いた後、JVCに移り、営農と生活改善を課題に村の女性グループの組織化や収入向上を手助けする活動をしているベテランの女性活動家である。二週間前に来日、九州から東北まで各地の村を訪ね、最後に奥秩父の旧大滝村(親族父母)にやってきた。大滝地区の林野率が98%を超え、家が建っているところだけが平地なのだが、それも急な斜面に人の手で作られた平地で、家一軒分の平地を作るのに、家一軒を建てる金がある、といわれている。

そんな集落のひとつ、大久保で、自分たちが作る野菜や大豆、キノコ類を加工し、販売している女性グループのリーダー千鳥敬子さんを訪ねた。集落の戸数は22戸、うち10戸が高齢者の一人暮らしで8戸は女性だという。その人たちはみな畑仕事をし、女性グループでも重要な役割を果たしている。敬子さんのお姑さんに当たる、京さんが同席、山の農業や暮らしについて色々話してくれました。今89歳、足も腰も丈夫で、毎日畑に出たり、女性グループが作って販売する漬物やみそ作りを差配している。

ネアリーさんは女性グループの活動より日本の年寄りの生態に関心を示した。

「カンボジアでは男も女も50歳になったら仕事をやめ、お寺通いでんびり暮らす。日本の老人は70歳、80歳でなぜそんなに働くのか」

みんな黙ってしまい、89歳のおばあちゃんが意気軒昂と答えた。

「だって働いていると、とても楽しいんですよ」

続いて敬子さんが言った。

「ここには若い人はいないんですよ、私は今62歳だけど、60代はここには、若いね、っていわれますからね。60代は若者なんです。」

今回のお題

## エコシュリンプ エコがついているエビだから!

レポーター  
光富佳子 / みつとみ・よしこ  
フォーラム・アソシエ 食のコーディネーター



特に、アスタキサンチンは、エビやカニに見られる赤い色の天然色素カロテノイドで、強い抗酸化作用があります。その抗酸化力は、一時

多彩な生物が生息する豊かな海の象徴です。しかし、その地域もマングローブがどんどん伐採され、使い捨てのような養殖場の拡大で環境が悪

の知らない世界があり、食材の向こうにはまだ私たちが気付かないでいる事があるのだとわかってきました。それらを学びながら「食」のあり方を考えていきたいと思っています。

**安心して食べられる中身と価格**  
エビの種類は多様にあつて、車エビなどは確においしいのですが、値段も高いので、やはりふんだんに使えるブラックタイガーが一番です。わが家の冷凍庫にも、生活クラブ生協で注文するエコシュリンプが常に入っていて、お助け食材のひとつになっていきます。解凍時の変な臭いもなく、シングルフローズンなので使いたい分だけ袋から簡単に取り出

せてとても便利です。Lサイズはてんぷらやフライ、Mサイズはカレーとか炒め物、サラダにも使えます。むき身のものもあり急ぐ時は便利かもしれません。また、エコシュリンプは、ほかの輸入物に使われているような農薬防除剤や保水剤を使っていない点も、安心して食べますし、そのぷりぷりした食感もおいしいさのひとつです。

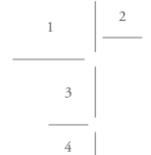
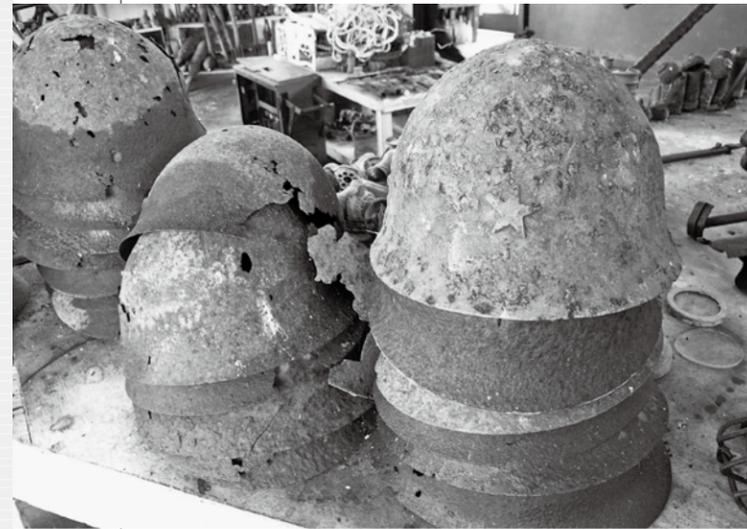
**エビはヘルシーで老化防止も?**  
エビ好き日本人といわれるところを見ると、私たちはきっと他の国よりもたくさんエビを食べているのでしょうね。外食の場合でも、「お肉よりもヘルシーだから」とシーフードを選ぶ方も多いようです。確かに、栄養的には上質なたんぱく質がほとんどで、他はカルシウム、ビタミンEを含み、脂質が少ないので「高たんぱく低カロリー」のヘルシーな食材です。そのほかにも、タウリンやキチン、アスタキサンチンなどさまざまなプラス要素を持った物質を含んでいます。

化し、生態系の破壊という悪循環の中にあります。エコシュリンプは、環境に負荷を与え、これらの養殖法とは一線を画し、地元古来からの「粗放養殖」を活用した有機的な仕組みの養殖方法で育てられています。

### 食材の向こうにあるもの

食育に関わる活動の中で、輸入食材のことを調べていくと、バーチャルウォーターや環境負荷の問題、不当な過重労働の事など様々なことが見えてきました。

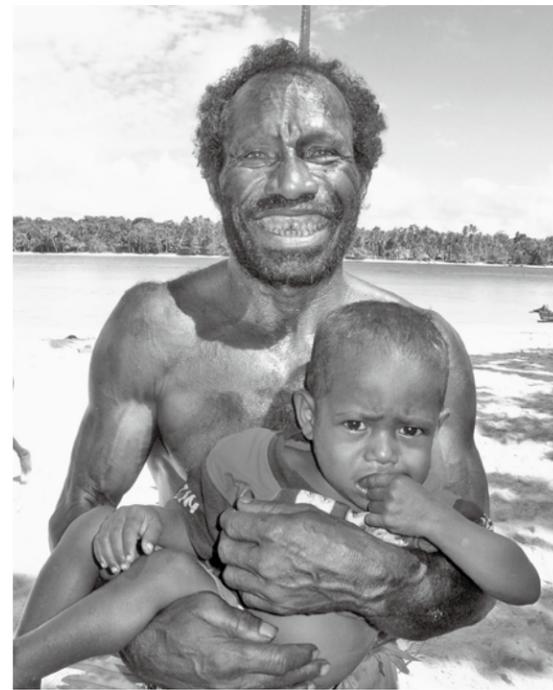
神奈川 食のコーディネーター「ラ・ターブル」とは...  
フォーラム・アソシエ「食育塾 食の豊かさ再発見・食のコーディネーター養成講座」を受講し認定されたコーディネーターが登録会員となり、食を通じて地域での出会いと学びの場を演出する活動をしているのが、神奈川 食のコーディネーター「ラ・ターブル」です。「食育」をテーマに、食の共有の場「食のサロン」をはじめ、各地でさまざまなサロンを開いています。(現在登録会員:30名)



- 1 — 日本軍の鉄カブト  
ニューギニア島の西半分に位置するパプア州は、太平洋戦争時に18万人の日本兵が亡くなったところ。この写真は日本軍の鉄カブトですが、星のマークがまだ残っています。撮影したピアク島はニューギニア本島から少し離れた小島で、日本軍が徹底抗戦したところだそうです。現地の人には日本の軍歌を歌う人もいて、戦争を間近に感じさせます。またジャングルには数万の遺骨が眠っているという事実に言葉を失いました。
- 2 — 島のおどり  
ピアク島からさらに小舟で2時間半、コバルトブルーの海を渡ってニャンソレン島という小さな島に行きました。槍を持った男が威嚇しながら舟に乗りこんできたので驚きましたが、女性たちが浜辺で踊っていたので歓迎の挨拶とわかりました。海も砂浜も初めて見る美しさでした。
- 3 — おじさんのおねだり  
槍を持った男に一枚撮ってくれと言われて撮った一枚。よく見るととても人なつこい顔の方でホッとしました。
- 4 — ヤシガニ  
島の村長さんが、ホレッと放して見せてくれたヤシガニです。30センチくらいの大きさで、足をヤシの木と勘違いするのか追いかけられました。最後は塩で茹でてもらい美味しくいただきました。イセエビと一緒に食べましたが、ヤシガニもなかなかの美味です。

(2009年7月撮影)

このコーナーでは皆様の写真を募集しています。  
募集内容◎アジアを旅した写真5枚程度(日本も含みます) 詳しくはAPLA/あぶら事務局(TEL:03-5273-8160)までお問い合わせください。皆様からの応募をお待ちしております!



## 編集後記

世の中には値段をつけて売り買いはいけないものがたくさんあります。血液や内臓がそうだし、土や水や森や川、海もその範疇にはいる。地球を市場競争で覆うグローバリゼーションは、それらもろもろ、この地球上の一切を商品にしてしまいました。

今号は、いま深刻化する環境破壊、貧困の広がり、人権侵害の背後にある、こうした現実を「水」を切り口に探ってみました。(大野)

6号をもってコラムの第一弾が終了します。毎号「堀田正彦のアジア食い倒れ」のイラストを書いてくれたのはATJスタッフの保光さん。毎回イラストを考えてもらうのがとても苦しそうでしたが、イラストを添えてもらうことで、より一層コラムが楽しいページになりました。コラムの内容によって若い堀田正彦をイメージしたりしてくれていましたが、皆様は気付いていましたか？ この場をかりて保光さんにお礼を述べたいと思います。ありがとうございます！(吉澤)

ふとマチュピチュの水路(どうやって水を引いているか今も謎)のことを思い出しました。水は生の源ということ、大きな力が押せる度に高度な知識や共有の概念が失われていくことは古今東西変わりませぬ。

さて、今号で「むらを歩く」を除く3つのコラムが終了、次の方へバトンタッチします。私の知ったか卓上旅行コーナーもこれで幕引き。お付き合いありがとうございました！(松田)

## ハリナ HALINA

2009年秋号 vol.02-no.06  
2009年11月1日発行

【編集長】  
大野和興

【編集者】  
吉澤真満子、松田麻衣子

【表紙写真】  
長倉徳生

【デザイン・制作】  
十年舎

【編集・発行】  
特定非営利活動法人APLA  
(APLA/あぷら: Alternative Peoples Linkage in Asia)

〒169-0072  
東京都新宿区大久保2-4-15  
サンライズ新宿3F  
tel. 03-5273-8160  
fax. 03-5273-8667  
e-mail info@apla.jp  
URL http://www.apla.jp

【印刷】  
株式会社セイズ

APLA web siteでは、本誌に掲載されている写真の一部をカラーでご覧いただけます。  
http://www.apla.jp/05/05\_halina.html

事務局の動き(2009年8月～10月)	
8月 5日～12日	理事の市橋氏が民衆交易20年調査の事前調査のためネグロス訪問をしました。
8月 8日、9日	和光大学ネグロス短期留学生に農村ツアーを大橋が行いました。
8月 10日～11日	BMW技術協会第2回BM基礎セミナー、土と水の学校に吉澤が参加しました。
8月 17日～21日	名誉顧問・前島氏がネグロスを訪問されました。
8月 23日～26日	北部ルソンにて、BMWプラントの最終確認のため、『匠集団そら』の星加氏と大橋が現地入りしました。
8月 25日～9月 1日	北部ルソンBMWプラント出水式参加、及びネグロスNBA会議、ATFI理事会出席のため秋山がフィリピンを訪問しました。
9月 4～6日	APLA企画「北海道の酪農現場を訪問する旅」開催。
9月 12日	ATJ20周年記念シンポジウム&パーティ参加。
9月 14日	アジア学院へ秋山、大橋、吉澤が訪問しました。
9月 14日	マスコバド糖製糖工場社長スティープ氏を囲んで勉強会を開きました。
10月 16日	APLA理事会・評議員会開催。
10月 3日、4日	グローバルフェスタJAPAN2009に出展しました。
10月 6日	PARC(パレスチナ農業復興委員会)のフェアトレード部責任者サリーム・アブガザレ氏を招いて、パレスチナ・ガザ緊急支援報告会を開きました。
10月 7日	フィリピン・台風16号(ケツァーナ)によるマニラ周辺地区への被害、インドネシア・スマトラ島沖地震の被害に対する災害支援の募金呼びかけを開始しました。
10月 8日～10日	『互惠のためのアジア民衆基金(APF)』設立総会、及びドゥレコーブ(韓国)での収穫祭に参加するため、共同代表の村井氏、理事の廣瀬氏、インドネシア駐在の津留、事務局長の吉澤が韓国を訪問しました。
10月 11日～16日	『互惠のためのアジア民衆基金(APF)』設立総会に参加したアジア5ヶ国(フィリピン、インドネシア、東ティモール、パレスチナ、パキスタン)のパートナーたちとドゥレコーブの交流ツアーに吉澤が参加しました。
10月 25日	フォーラム・アソシエ『アソシエーション文化祭』に出展しました。

## 事務局からお知らせ

## 災害支援募金にご協力ください!

APLAでは、現在下記の災害支援募金を呼びかけます。

- ◆フィリピン・台風16号(ケツァーナ) マニラ周辺地区への被害
- ◆インドネシア・スマトラ島沖地震の被害

この度の災害支援募金は、APLAの関係組織である日本キリスト教協議会(NCCJ)も参加しているACT(ACT/Action by Churches Together)という団体を通じて災害支援を行います。

※ACT/Action by Churches Together: プロテスタント系の世界的組織で緊急支援を行っている団体。《http://act-intl.org》

■災害支援金は下記までお願いいたします。

郵便振替でのご入金の場合

00190-3-447725 特定非営利活動法人APLA

※通信欄に、「フィリピン台風支援」「スマトラ沖地震支援」と明記ください。記載がない場合は両方への支援金とさせていただきます。

銀行口座振込の場合

みずほ銀行高田馬場支店(普通) 2650327 特定非営利活動法人APLA

※info@apla.jpへご入金の連絡、及び「フィリピン台風支援」「スマトラ沖地震支援」とちらの支援かをご連絡ください。お電話やFAXのご連絡でもかまいません。

皆様からのあたたかいご支援をお待ちしております。ご協力どうぞよろしく願い申し上げます。

## APLAでは会員さんへメーリングマガジンを配信しています。

APLA会員限定のメーリングリストを不定期に流しています。まだ登録されていない方はぜひ登録してください。(事務局までご連絡下さい。info@apla.jp)

From Northern Luzon, Philippines【北部ルソンより】

## BMWのプラント設置が完了しました。

北部ルソンのパルトナーCORDEVでは、地元農業改革省と共同で堆肥作りを行っています。昨今の食糧危機や原油高騰などによる肥料の問題を解決するために、有機肥料を使った米作りを取り組み始めました。CORDEVスタッフのグレッグさんがネグロス島で活用されているBMW(パテリア・ミネラル・ウォーター)の技術を見て持った、自分たちの地域でもBMWを使ってより質のよい堆肥を生産したいと



堆肥にBMWを散布。神父さまのお祈りもありました。



星加さんによるBMW技術の説明会の様子。

From Indonesia【インドネシアより】

## エコシュリンプ加工工場・ATINA社でせっけん製造を開始しました。

オルター・トレイド・インドネシア(ATINA)では、7月にせっけんを製造する機械を自作、8月の試作を経て、10月から本格製造を開始し、ATINA工場内のラインや床の洗浄に自家製液体せっけんを使用する予定です。そもそもATINAでせっけん作りを始める動機は、地域の水質改善のために環境にやさしいせっけんの使用が必要だと考えたからです。インドネシアでは合成洗剤の使用が一般的で、エコシュリンプの産地シドアルジョヤグレスックでも人口増加による地元河川の汚染がエビの収穫量にも影響を及ぼすのではな



液体せっけん製造機械

いかと懸念されています。ATINAは地元社会に合成洗剤の使用を止め、ヤシ油を原料とする環境にやさしいせっけんの使用を呼びかける環境改善プログラムを計画しています。インドネシアでは、ATINAの従業員共同購入活動を通じて、まずはATINA従業員の間で、そして養殖池関係者へ、そこから地元地域へと段階的にせっけん使用の働きかけを行う予定です。(APLAインドネシア・東ティモールデスク・津留摩子)

やたわわになるミニトマトの写真を見て、「すごい」というため息と共に、様々な質問が続きました。この堆肥センターが設置されているイザベラ州はフィリピンでも穀倉地帯と呼ばれ、

米やとうもろこしの栽培が盛んなところですが、近隣の山間部にはバナナ、コーヒー、果樹、カカオなどの生産者たちがいます。今後、BMWは堆肥生産に使用するだけでなく、野菜や果樹の育苗、家畜

にも使ってみて、米以外の農家にも配布して行きたいと考えています。(APLA・吉澤真満子)

〔注〕パテリア(微生物・ミネラル)堆肥植物・ウォーターの略。パテリアとミネラルの働きをうまく利用し、土と水が生成される生態系のシステムを人工的に再現する技術のこと。